



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 59 回 日本語教育方法研究会

オンライン開催

2022 年 9 月 10 日(土)

第 59 回研究会は、新型コロナウイルス感染症の情勢を鑑みてオンライン開催といたします。

会長 松崎寛

TABLE 1 第 59 回研究会開催について

日 時	2022 年 9 月 10 日 (土)
会 場	オンライン
開催委員	内藤真理子 (事務局：電気通信大学)、畠山理恵 (同左：文化学園大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:30	全体会 (説明)	12:50	総会
10:00	ラウンド A 開始	13:15	ラウンド C 開始
11:00	ラウンド A 終了	14:15	ラウンド C 終了
11:10	ラウンド B 開始	14:25	ラウンド D 開始
12:10	ラウンド B 終了	15:25	ラウンド D 終了
	昼休み開始	15:35	全体会 (講評)
12:50	昼休み終了	16:15	研究会終了

【参加方法】

第 59 回研究会では、運営上の都合により参加者の上限を 160 名といたします。参加するためには参加申込が必要です。参加受付は、まず、会員優先で行います。上限に達しない場合は、非会員からの参加申込も受け付けます。

~~4) 会員優先受付期間：8 月 1 日～21 日 ⇒ 終了しました。~~

~~参加申込フォームのリンクは会員一斉メールでお知らせします。~~

2) 会員・非会員受付期間：8 月 22 日～9 月 3 日

実施の有無、参加申込フォームのリンクは研究会ウェブサイトでお知らせします。

なお、今回の研究会は会員、非会員いずれも当日参加はできませんので、ご注意ください。

【プログラム】

発表課題の前の番号は、ラウンドごとの番号で、括弧内は全体の通し番号です。例えば「B03(20)」は、ラウンド B における発表番号は 03 で、全体の通し番号は 20 という意味です。研究会誌にはこの括弧内の通し番号の順番で掲載されています。なお、今回の研究会で口頭発表は行いません。

【午前の部】

●ラウンド A 10:00-11:00（発表件数 17 件）

A01(1).語の使い方という視点での語彙と文法の問題作成 ―解答のためのグループでの話し合いの分析―
三好裕子（元チューラーロンコーン大学）

語を適切に使用するには語彙と文法の知識が必要だが、語彙学習は訳語を覚えることが中心で、既習語を適切に使えないことが多く、使用語彙が増えにくいという傾向がある。そこで、語の使い方という視点で語彙と文法を指導するための問題を作成し、授業に用いて指導を行った。本研究では、授業における問題の解答のためのグループの話し合いを分析し、指導の効果と改善すべき点を探った。その結果、助詞や共起関係など語彙学習で重要な注目すべき点への気づきと、コーパスの利用の定着が確認された。一方、問題の偏りにより十分に意識されていない指導項目があるなど、修正点も見つかった。

A02(2).日本語教育における貿易ゲームの応用 ―交渉表現の獲得と国際協力に対する理解を目指したタスク活動として―

森岡千廣（京都先端科学大学）・川西菜緒（元大阪みなみ日本語学校）

グローバル人材教育を考えると、素養すべき最も重要な力の一つは「交渉力」である。日本は現在多くの留学生を受け入れているが、日本語を用いて実践的な交渉トレーニングをする機会は必ずしも多いとは言えない。また、国際社会で活躍していくであろう彼らにとって、国際協力に対する理解を深めることも重要である。そこで、本稿では、CBI の考え方にに基づき、国際協力への深い理解を目指し開発された「貿易ゲーム」を内容（タスク）に据え、学習言語項目として「交渉表現」を設定したタスク活動を試みた。その結果、学生たちは交渉表現・言語技術としての交渉方略を実践する機会を得、国際協力についても大きな学びを得たようだった。

A03(3).オンライン教育における「お話し会」を通した留学生支援の試み ―支援者としての日本語教師の役割を考える―

宮口徹也（岡山理科大学）

2020 年に始まった新型コロナウイルスの世界的流行は、それまでの教育のあり方を大きく変えることとなったが、特に日本語教育においては、入国制限により多くの留学生が自国からオンライン授業の受講を余儀なくされるなど、非常に厳しい状況を経験した。本稿では、これまで日本語教師が学習者に対しどのような役割を果たしてきたか、またオンライン授業への移行によりそれがどう変化したかに触れながら、筆者が学生支援として実施したオンラインでの「お話し会」についてその成果と学生の反応を報告する。

A04(4).LTD 話し合い学習法を用いた自己と関連付けて読む読解活動

田中典子（名古屋大学）・近藤行人（名古屋外国語大学）

中級レベルの日本語学習者を対象とした読解クラスにおいて、異文化間能力の育成を目指した内容重視の実践を行った。この実践では、学習者が主体的に参加し、自らに関連付けて問題を捉え、解決する活動を行うため、予習ノートに基づいて授業時間中に学習者同士で話し合いを行う LTD 話し合い学習法を取り入れた。学習者の予習ノートに記述された自己との関連付けの内容、及び授業での話し合いから、テキストが指摘する

概念について自身の経験文脈との矛盾を顕在化させつつ、理解を構築している様相が観察された。

A05(5).学部留学生によるライフラインチャートを用いた人生の軌跡の省察 ―学びの共同体の構築を目指した対話的实践―

衣川隆生(日本女子大学)

発表者は、留学生がお互いの「人生の軌跡」について対話することを通してアイデンティティの形成を促すとともに、今後の留學生活の過ごし方、キャリアパスのあり方を考えるきっかけを作ることを目的とした授業を実践した。実践は、1)他者の人生の軌跡をライフラインチャートに描く、2)自分自身の人生の軌跡をライフラインチャートに描く、3)それをもとにライフストーリーインタビューを行い、記事にまとめ発表する、という対話的实践を多層的に組み込んだ。その結果、受講者が多様な経路を経て<いま・ここ>にいるという認識を持つようになる過程が観察された。

A06(6).学習者は事前学習課題としての文型動画視聴をどう受け止めたのか ―初級日本語オンライン教材の開発に向けて―

工藤嘉名子・伊東克洋・西島絵里子(東京外国語大学)

本稿では、初級日本語オンライン教材として開発した「文型学習動画」の試行について報告する。初級レベルの2クラスにおいて、動画視聴を事前学習課題とした。アンケート調査をもとに、①有用性、②負担感、③スライドデザインの3つの観点から、動画の使用感について分析を行った。有用性に関しては高い評価が得られ、動画視聴が日本語学習の役に立ったことがわかった。同様に、デザインについても、文字フォントや色使いを含め、高い評価を得た。一方、動画の長さや他の課題との兼ね合いなどから、動画視聴をやや負担に感じていることがわかった。教材自体は一定の評価を得たものの、今後は学習者の負担感を軽減できるように改善していきたい。

A07(7).小学校社会科教科書の語彙調査 ―社会科共通語彙の特徴を探る―

山本裕子(愛知淑徳大学)・川村よし子(元東京国際大学)・鷲見幸美(名古屋大学)

発表者らは、小学校の教科書で用いられている語彙を調査し、外国人児童のための日本語支援環境の提供を目標とした研究を進めている。本発表では、社会科の教科書を対象に、学年に関わらない共通語彙に着目して、調査、分析した結果を報告する。全体の延べ語数は133,185語で、異なり語数は8,321語であった。学年進行に伴って語数は急激に増え、6年生は1年生の5倍に上る。また、全学年の教科書で共通して用いられる語には、「学習・様子・確かめる・まとめる・話し合う」など学習するための語が多く、3~6年生の「社会科」に限定してみると、時事的な語や「町作り・移り変わり・産業・盛ん」などより社会科固有と思われる語が用いられていることがわかった。

A08(8).日本語学習者・母語話者が考える多義動詞の基本的語義とは何か

大神智春(九州大学)・森田淳子(西南学院大学)・麻生迪子(四天王寺大学)・鈴木綾乃(横浜市立大学)・林富美子(明治大学)

本研究では語彙学習教材開発を視野に入れた基礎調査として、中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者が多義動詞のどの語義を基本的語義だと考えているのかについて、「ある」「きる」「でる」「つける」「する」を対象に調査を行った。その結果、母語話者は特定の語義を基本的語義として回答する傾向にあった。学習者については、「する」では特定の語義に回答が集中していたが、それ以外の動詞では母語話者より回答が分散する傾向にあった。学習者は接触頻度が高い語義を基本的語義として想起しやすいと推察される。

A09(9).第二言語習得遅滞の JSL 児童の現状と授業の工夫

王睿琪（東京外国語大学）

本研究は、第二言語習得遅滞の JSL 児童の現状を分析した上で、紙の日本語教材のほか、絵本や視聴覚教材と併用しながら日本語指導を試みた。その結果、家庭内で日本語習得の支援と日本語のインプットの量がほぼゼロに近いことがわかった。また、文字情報より、音や映像、文字情報が同時にインプットできる絵本や視聴覚教材が語彙の理解・定着、モチベーションの維持に効果があると観察された。しかし、継続的で体系的に日本語指導を行うために、「日本語指導教材」の開発・配布、「指導記録」の導入、「教育・支援ネットワーク」の構築が急務である。

A10(10).タラとバの選好性に関する予備的考察 一文機能に着目して一

池田尋斗（清風情報工科学院）

条件文を作る形式であるタラとバの使い分けは、主節末モダリティ、条件節述語と主節述語の素性などの観点から、タラには制約がなくバには制約があるとされてきた。しかし、日本語学習者の視点から見た場合、敢えて制約のあるバを使用する動機は明らかでない。そこで本稿は、バがタラより選好される環境を明らかにする必要があると考え、日本語母語話者を対象にタラとバの選好性を問うアンケート調査を行った。その結果、タラとバの選好性は文機能という概念の影響を受けていることが分かった。日本語学習者にタラとバの使い分けを提出する際も、文機能の視点から説明することで、学習者の負担を軽減できる可能性が示唆された。

A11(11).日本語学習者と母語話者のコミュニケーション活動に関する気づき 一日本語コミュニケーション論の実践終了時のエッセイの分析を通して一

許明子（名古屋大学）・謝カン月（名古屋大学大学院生）・西澤萌希（名古屋大学大学院生）

本研究では日本語コミュニケーション論の実践を通して、日本語学習者と日本人学生が自分のコミュニケーション活動についてどのような気づきが得られ、今後どのように生かしていきたいと考えているかについて、実践終了後に作成したエッセイのテキストデータを KH コーダーで分析し考察を行った。その結果、日本人学生と日本語学習者のコミュニケーション活動の捉え方に特徴はあるものの共通点として対人関係を捉えた語句の共起が見られた。過去には特定の個体との関係として捉えていたコミュニケーション活動が「自分自身と相手」「話し手と聞き手」が共起して出現しており、対人関係にはそれぞれの役割があることに気づいていることが分かった。

A12(12).防災無線における「やさしい日本語」の有効性

幡手千華（福岡女子大学大学院生）

防災無線は災害時の重要な情報源であるが、これまで防災無線を対象にした「やさしい日本語」研究はされてこなかった。そのため、本研究では、東日本大震災の防災無線を「やさしい日本語」の観点から分析し、防災無線を「やさしい日本語」へ書き換えることは可能か検証した。その結果から、防災無線を現在の「やさしい日本語」のルールで書き換えることは難しく、新しい「やさしい日本語」のルールが必要だと考えた。そこで、本研究では、防災無線を考慮した「やさしい日本語」の新しいルールと「やさしい日本語」へ書き換えた防災無線を提案する。

A13(13).日本語聴解学習におけるシャドーイングの効果 一日本語を第二言語として学習する学習者と第三言語として学習する学習者を対象に一

布袋進一（東北大学大学院生）

シャドーイングによる日本語リスニング力の向上に着目し、第二言語として日本語を学ぶ学習者（以下、第

二言語学習者)と第三言語として日本語を学ぶ学習者(以下、第三言語学習者)を対象に、日本語の聴解学習におけるシャドーイングの効果を検討した。参加者を第二言語学習者群と第三言語学習者群の2群に分けて、1問1点とした聴解テスト10問のプレテスト・ポストテストを実施した。第二言語学習者群と第三言語学習者群の間では、聴解テストの平均得点の差に統計的有意な差はなかった。しかし、各学習者群内の聴解テストの平均得点の差には統計的有意な差があり、シャドーイングが日本語の聴解学習に有効であることが示唆された。

A14(14).ラポール・マネジメントからみた助言における言語表現 ―中国人日本語学習者のコミュニケーション能力の向上を目指して―

宋凌逸(名古屋大学大学院生)

コミュニケーションをする時、人間関係を壊しやすい言語行動として「助言」があげられる。本稿は、日本語母語話者(JN)との比較を通し、中国人日本語学習者(CJL)はどのように助言をするのか、について明らかにしたい。談話完成テスト(DCT)を行い、データを収集した。また、意味公式を使い、データを分析した。ラポール・マネジメントの枠組みで、人間関係の調整について考察した。その結果、CJLは相手に近づき、良い人間関係を構築したいという意欲が強かった。しかし、相手の「個人として配慮される」という権利を侵害する恐れもあることがわかった。日本語会話授業で、この「助言」場面で注意すべき必要なポイントを教えていると示唆したい。

A15(15).初級の日本語教科書における年齢の質問の扱い

吉井雄樹(西安電子科技大学)

年齢に関する質問の言語行動の解明はいまだ十分とは言えない。本稿ではその基礎的な調査として日本語教育の文脈で年齢を質問する形式がどのように扱われているのかを探索的に調べ、今後の課題を問題提起することにした。調査では初級の日本語教科書で扱われている年齢の質問形式を抽出し、それらを先行研究の分類と疑問詞、丁寧さにおける類似性からカテゴリ分析した。分析結果から直接質問が多く扱われていることを明らかにし、訓練上の転移や教室活動への参加の負担の可能性を指摘した。今後は、分析対象の拡大や、実際の会話で用いられる間接質問や誘発質問の変異形を記述し、何が行われているのかを解明することを問題提起した。

A16(16).中国の大学における日本語母語話者教師と非母語話者教師の利点に関する考察 ―学習者の視点から―

李雪珍(宇都宮大学大学院生)

本研究の目的は学習者の視点から日本語母語話者教師と日本語母語話者教師の利点を明らかにすることである。学習者に対する自由記述アンケート調査を実施して分析した。その結果、非母語話者教師は成功できた日本語学習者として、学習者の問題や学習上の難点を見つけやすく、中国語で日本語の語彙や文法をより詳しく説明できる。そして、学習者を日常生活の困惑から助けられ、就職指導もできる。その一方、母語話者教師は日本語母語話者として、日本語の考え方や正確に日本語でコミュニケーションする方法を学習者に伝えられ、日常生活の日本語、日本人の考え方、多様な慣用表現を教えられる。また、より日本語文化に詳しく日本文化が教えられ、学習者に日本語リソースを提供できる。

A17(17).協働によるシナリオ作成と「アテレコ」活動についての実践報告

山本晃彦(鈴鹿大学)・古田朋子(関西大学)

本研究は音声を消去した洋画のワンシーンを見ながら、登場人物の行動や表情をもとにグループでシナリ

オを作成し、アテレコを行う活動についての実践報告である。実践の結果、場面や人物に合わせた表現を考えることによるレジスターの意識化が見られた。また、疑問から仮説を立て根拠を説明するといった論理的思考の活性化や、協働作業の円滑化を意識した発話、行動も見られた。

●ラウンド B 11:10-12:10 (発表件数 14 件)

B01(18).日本語母語話者と中国人日本語学習者の謝罪メールに対する評価 ―評価観点と同じ着目点に対する評価結果の差異に注目して―

李嘉隆 (名古屋大学大学院生)

本稿は、中国人日本語学習者と日本語母語話者の謝罪のメールに対する評価を考察するものである。具体的には、10 人の協力者に 8 編の中国人日本語学習者が書いたメールに対して順位づけという手法で評価させ、発話思考法によってデータを収集して分析した。その結果、中国人日本語学習者はメールの形式面をより重視するのに対し、日本語母語話者は謝罪の内容と態度をより重視することがわかった。また、どのような内容を書くべきかについて日中間の認識の差異が窺える。謝罪のメールを書く際に形式の正しさのみならず、申し訳ないという態度を相手に伝えることも大事であることを中国人日本語学習者に理解させる必要性が示唆された。

B02(19).オンライン授業期間における授業観・授業運営の移り変わり ―文章表現科目を事例として―

畠山理恵 (文化学園大学)

本稿は、コロナ禍のオンライン授業期間における、筆者の授業観・授業運営の把握を目的とする。2020 年度からの 2 年 4 学期は、教師生活で初めて非対面での授業運営を強いられ、試行錯誤の連続であった。この間日々何を情報源・判断材料とし、どう解釈し、次の授業・次の学期に向かっていったかを明らかにするべく、文章表現科目の授業記録その他を追ったところ、学生の声を最大の情報源としていたこと、学生の負担・クラス構成員間の関係性に注意を払っていたことがわかった。また、非対面での運営が予想に反して長引くにつれ、授業に対する認識は次第に変わっていった。

B03(20).日本の大学生との交流が海外の学習者に与える気づき ―日本と中国におけるオンライン国際交流の実践―

細井駿吾 (所属なし)・片上摩紀 (環太平洋大学)

本稿は、日本の学部生と日本語専攻の中国人学生を対象にした交流会実施後に、振り返りアンケート調査を実施し、異なる文化や価値観を持つ人々への深い理解、人間関係の構築を促進するためのオンライン交流の可能性を検討した。アンケートの結果、交流会の機会を定期的に提供することは、1 回きりの交流会よりも、深い異文化理解や人間関係構築につながったと言える。また自由記述の結果から、海外で日本語を学ぶ学習者のために、交流会以外の日本人学生と海外で日本語学習している日本語学習者が継続的に交流するツール構築の必要性が示唆された。

B04(21).新・対面日本語クラスのあり方について考える ―オンライン授業を経た日本語教師の省察から―

平田友香 (国際教養大学)・古田梨乃 (大阪みなみ日本語学校)・宮淑 (国際教養大学)

国内の日本語教員である研究者らは、新型コロナウイルスの影響により日本語クラスを 2 年間オンラインで行うことを余儀なくされたが、2022 年 4 月から 5 月にかけて対面でのクラスが再開された。本研究は、研究者らの日本語教員としての自身のこの経験や思いについて振り返るものである。これを通し、対面クラスにおいては学習者が日本にいるということを最大限に活かせる授業を考えていくとともに、オンライン経験前に戻るのではない、オンラインクラスの利便性や効率性も活用した「新・対面」日本語クラスを築いていく努

力をする必要があることが認識された。

B05(22).日本語学習辞書の副詞記述に関する調査報告

関かおる（神田外語大学）・尾沼玄也（拓殖大学）・砂川有里子（筑波大学）

本稿は、日本語モノリンガル学習辞書において、意味がよく似ており、使い分けの難しい副詞の語釈記述と例文のあり方について調査を行った結果報告である。この種の小型辞書で類義語の使い分けを語釈で示すのは非常に難しいが、語釈と例文の記述に共起する語彙や表現を示すなどの工夫で、学習者が類義表現のどちらを使うべきか迷ったときの参考になるのではないだろうか。

B06(23).音象徴性から中国人日本語学習者のオノマトペ指導 ―食感表現を中心に―

侯宜卓（東北大学大学院生）

本研究では日常生活で使われる日本語と中国語の食感表現に関するオノマトペを収集したうえで、両言語の共通する音象徴性を明らかにし、中国人日本語学習者のオノマトペ教育への提案を為すことを目的とする。収集したデータから、日中の食感オノマトペには多くの類似する音象徴性が存在することが分かった。また、中国語人日本語学習者を調査対象とし、類似する音象徴性を持つ日中のオノマトペをセットとして提示し、インタビュー調査を行う。その結果、オノマトペを中国人への日本語教育に導入する際に、音韻的類似性が高いオノマトペをセットで提示すると、学習者がより理解しやすいと考えられる。

B07(24).複線径路等至性モデルを用いたシリア人日本語学習者の役割の分析

ラマダン ヘバ（大阪大学大学院生）

この研究はシリア人日本語学習者の「学習者の役割」を明らかにするために半構造化インタビューを行い、複線径路等至性モデルを使用して TEM 図を描き、調査協力の学習経験を分析した。3つのモチベーションステージから、学習者としての役割は①目的設定することと、②日本語に対するモチベーションを維持し続けることであることがわかった。

B08(25).話すことを重視した日本語聴解授業の実践

張彤（大連科技学院）

伝統的な聴解授業は聞く能力を育てるだけである。それで、多くの学生たちは聴解授業が難しく、おもしろくないと言う。特に、中国人学生にとって聴解はなかなか超えられない壁になった。話すことを重視した新しい教授法を取り入れた聴解授業は学生に勉強する意欲を奮い立たせ、学生の自主学習する能力を高める。さらに、学生の成績も上げられた。

B09(26).中国人留学生の自己PRの作成に関する一考察

戸田あゆみ（所属なし）

就職活動における最初のコミュニケーションの場は、書類である履歴書やエントリーシートであることがほとんどである。そのエントリーシートにおいて、自己PRは必須項目といえる。本論文は、日本で就職活動をする人数が多い中国人留学生がどのような自己PRを作成するのかを分析し、その特徴を明らかにするものである。

B10(27).渡日前の入学予定者に対するオンライン事前学習の効果と可能性 ―漢字学習へのモチベーション向上を目指して―

久野かおる・波村慎太郎・津坂朋宏・三宅祐司（東京福祉大学）

東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科では、コロナ禍で来日できない入学予定者に対し、2021年4月からZoomによるオンライン事前学習を実施してきた。今年の3月に入国制限が緩和され、6月末日現在ネパール152名、スリランカ13名、中国3名、ミャンマー1名、ジョージア1名、計170名が入学した。当別科が入学時にクラス分けのために実施しているプレースメントテストによってわかった渡日前のオンライン事前学習の成果、オンライン事前学習の中で漢字学習について気づいたこと、漢字学習に対するモチベーション向上を目的とした学習方法を報告する。

B11(28).「伝わる作文」を目指した作文授業 ―日本人学生を読み手として―

本間妙・中林律子・山本裕子（愛知淑徳大学）

学習者が読み手を意識し意図したことが伝わる作文を書く力をつけるため、中・上級学習者の作文に対して、日本人大学生に内容についてコメントをしてもらい、それを参考に作文の推敲をする活動を行った。また活動を学習者がどのように受け止めたか聞き取り及びアンケートを行った。以上の結果、学習者はコメントを好意的に受け止めていたが、内容や書き方によっては学習者が推敲に活かしづらいと感じたものもあり、適切な推敲には教師の指導が不可欠なことが確認できた。一方、多くの学習者が読み手の存在を真に意識し、通常の授業では得難い、自分の書いた作文が伝わる喜びを体験することができ、この活動が有用であることもわかった。

B12(29).語彙学習アプリの中身とは？ ―世界で最も使われている語彙学習アプリの語彙リストの傾向を巡る研究―

アブリル ノラ（早稲田大学大学院生）

本研究ではAndroid Play Storeのダウンロード回数トップ3の語彙学習アプリのコンテンツに注目し、今の市場で求められている語彙リストの傾向を計量的に分析し、各アプリの強みや語彙学習アプリ市場の補わなければならない部分を探った。結果として、JLPTや漢字のリストは語彙学習アプリの市場では最も多く、敬語とオノマトペのリストが最も少ないことがわかった。また、日本国内の日本語教育機関が作成するリストや生活者としての外国人のためのリストが少ないことから、ICT 語彙学習サポートが不十分であるということが明らかになった。最後に、語彙学習アプリの間で語彙リストのジャンルが異なるため、ニーズに沿ってアプリを選ぶべきだということがわかった。

B13(30).オンライン授業のための漢字教材開発

濱田美和（富山大学）

オンライン授業で使う漢字教材には、遠隔会議システムの画面共有機能で提示したときの文字の見やすさ、教師にとってコンピュータの操作が簡単なこと、教師が学習者や授業内容に合わせて手軽に修正を加えられることが求められる。本稿では、「同時双方向型オンライン授業対応」と「カスタマイズしやすい」をコンセプトにして開発を進めている漢字教材（漢字の意味、読み、熟語、例文などの基本情報を掲載したプレゼンスライド、筆順を再現した手書きの動画、教科書体の画像）について報告する。

B14(31).日本語学習者の自然会話における割り込みの頻度についての考察 ―BTSJ コーパスに基づく調査―

ZHANG XIAOTING（宇都宮大学大学院生）

本研究はBTSJ コーパスを用いて、会話における、日本語学習者の割り込みの頻度と割り込み生じた後、話者の移行状況を考察した。その結果、会話における、同等関係で初対面同士の会話の場合、割り込みの出現数は既知の人の場合より少ない。また、割り込みが生じた後、話者が移行するのは、既知の人の場合の方が初対面の会話より、話者が移行する割合が高い傾向があると見られる。日本語学習者の割り込みと話者移行の繋がりについて、話者の移行率が低いと観察された。更に、既知(友人)会話の場合、割り込みが生じた後、話者と

ターンの移行の率が高いため、会話を盛り上げる傾向が見られた。

【午後の部】

●ラウンド C 13:15-14:15 (発表件数 14 件)

C01(32).日本企業における外国人材への日本語支援 ―協働コミュニティを創出するためのパターン・ランゲージの観点から―

鍋島有希 (桜美林大学)・黒田史彦(東京都立大学)・木下直子 (早稲田大学)

本研究は、「外国人材との協働コミュニティを構築するためのパターン・ランゲージ (協働パターン)」の作成により得られた、日本企業で有効な外国人材への日本語支援について報告する。協働パターンの作成にあたり、外国人材を採用・雇用する 11 社 26 名にインタビューを行い、そのデータから KJ 法によりパターンを抽出した。その結果、31 パターンが抽出されたが、日本語支援に関連していたパターンは、「伝える工夫」「母語の使用」「日本語の磨きあげ」の 3 パターンであった。本報告では、この 3 つのパターンについて詳しく説明する。

C02(33).学習者のための初級日本語文法ウェブツールの開発

ヨフコバ四位エレオノラ (富山大学)・稲葉和栄 (秀明大学)・久保田美子 (早稲田大学)・堀恵子 (東洋大学)

本研究は学習者が自律学習や振り返りのためオンラインで利用できる初級の日本語文法 (参照文法) ツールの開発を目的としている。文法項目には、文法研究の成果を取り入れ、学習者が理解しやすいよう簡潔で平易な記述を施し、また運用に必要な実用的な用例を記載する。本ツールの最大の特徴は、類義表現 (似たような機能・用法を持つ文法表現) の使い分けに必要な情報を提示することである。

C03(34).日本語指導を必要とする生徒との仲介者としての支援員の役割

近藤行人 (名古屋外国語大学)・櫻井省吾 (名古屋外国語大学)・衣川隆生 (日本女子大学)

自らが日本語指導を必要とする児童生徒であった背景を持ち、高校で外国人生徒支援員として勤務する人材に対し、職務内容と業務において大切だと考えていることについて、インタビューを実施した。対象者は、高校において保護者との通訳、母語や日本語による授業補助に携わっていた。これらの業務は、保護者と学校、教師と児童生徒、あるいは児童生徒と学習内容との仲介を実施するものであり、業務遂行のためには、学生が日本で初めて学ぶ概念を日本語、並びに母語で媒介すること、壁を崩すという態度をもって、学ぶ姿勢、態度を保障することが語られた。

C04(35).講義音声から見る物理専門語

喜古正士 (早稲田大学)

日本語で専門用語を学ぶことは重要であるが、留学生にとっては難しいことである。したがって、専門分野での基本的なコミュニケーションに必要な用語の語彙を決定することは、指導者にとっても学生にとっても重要である。筆者は過去の論文で、物理学の特徴的な単語を問題 (高校の問題集、センター試験、日本留学試験、大学入試問題) から効率的に抽出することを示した。本論文では、物理学の講義音声进行分析し、その結果を先行研究と比較することで、専門用語の重要な傾向を明らかにすることを目的としている。効果的な教授法・学習法の指針になることが期待される。

C05(36).初級日本語学習者の音読音声に見られる特徴 ―予備調査の音響分析結果より―

金珠（大阪大学）

本研究は、日本語学習者にとっての効果的な音読指導方法を探ることが目的である。その第一段階として本稿では音響分析の手法を用いて初級学習者の音読の特徴を「発話速度」と「ポーズの位置・頻度・長さ」に焦点を当てて分析し、音読音声の実態を記述した。学習者は音読材料文の内容を理解したものの、音声処理に時間かかる学習者が多く、発話速度は一定ではないことが明らかとなった。音読は発話速度を重視した音声指導が必要である。また音読指導の一環として文の区切りを記号で表示する指導が有効的であると考えられる。視覚的に「意味のまとまり」が提示されることで、学習者が「読む際の一まとまり」をつかみやすくなるメリットがある。

C06(37).翻訳コースを通した日本語学習 ―日英・英日翻訳アクティビティとプロジェクトによる言語と文化の習得―

日部八重子（テンブル大学ジャパンキャンパス）

日本語教育において翻訳など母語を介在する活動は、目標言語によるコミュニケーション重視の教授法が重要視される中で取り上げられことは少ない。しかし、近年、多言語・多文化主義の促進や発展のために翻訳を通した語学教育(TILT: Translation in Language Teaching)への関心が高まっている（山田他、2021）。翻訳を通したアクティビティは起点言語と目標言語両方を多角的に見ることができるからだ。そのような背景を踏まえ、本稿では翻訳コースにおける様々なアクティビティやプロジェクトを用いた授業の実践を記述する。また、翻訳コースを使った日本語学習に関して、ディスカッションでの学生意見とアンケートの分析を通し効果や課題を検証する。期末に行ったアンケートでは翻訳理論のテクニック習得、翻訳アクティビティやプロジェクトを通した学習を学生が有効だと考えていることがわかった。

C07(38).中上級日本語クラスにおける視覚イメージの利用に関する一考察 ―Google Jamboard を用いた実践報告から―

佐古恵里香（京都精華大学）

本稿は、視覚イメージの利用に関する提案・考察を行うことを目的としている。まず、中上級日本語学習者に「料理のレシピを紹介する」という課題を与え、対面（a 群）とオンライン（b 群）で同じ授業を実施し、提出形式（Google Jamboard、Microsoft Word、プリント）を選ばせた。次に、両群の各学習者の課題における総文字数と総視覚イメージ数の t 検定を行った。その結果、総文字数において得られた p 値は 0.5253 で、総視覚イメージ数において得られた p 値は 0.0006 であった。視覚イメージ数には、授業形態または提出形式が影響を与えている可能性が示唆された。これらの要因を具体的に考察し、対面授業における有用なツールとして Google Jamboard を使用する教育的意義を述べた。

C08(39).大学院科目で日本語教育における管理運営業務を扱う試み

中川健司（横浜国立大学）・浦由実（フリーランス）・半沢千絵美（横浜国立大学）・金蘭美（横浜国立大学）

先行研究でも垣間見えるように、日本語教員は、教える以外にも幅広い管理運営業務を行っているが、それについて学ぶ場は非常に限られているのが現状である。日本語教師養成講座や学部・大学院の日本語教育専攻で管理運営領域が扱われることは稀であり、学会・研究会等でも情報共有や議論がほとんど行われてこなかった。まだ数は多くないが、近年日本語教育における管理運営業務について学ぶ場を設ける試みが出始めている。本発表は、日本語教育専攻の大学院科目で日本語教育における管理運営業務を扱った事例を報告するものである。

C09(40).日本語教育におけるシャドーイングに関する意識調査 ―中国人日本語学習者を対象として―
常童（湖南大学大学院生）

近年では、シャドーイング練習が数多くの外国語教育現場で徐々に実践されるようになった。シャドーイングが学習者の第二言語習得能力の向上につながる一方で、使用不当で学習者の自信を妨害する恐れもある。本研究では、アンケート調査の形式で、中国人日本語学習者を対象として、シャドーイングに対する意識を明らかにし、学習効果を高めるためのシャドーイングの実施方法について検討する。調査の結果からみると、シャドーイングの学習効果を最大限に発揮させるため、理想的な練習材料、教師としての工夫が欠かせないことが分かった。

C10(41).日本語学習者のための日常会話におけるオノマトペの語彙選定

伊藤萌夏（東京育英日本語学院）・北野朋子（関西大学）・森岡千廣（京都先端科学大学）・蔵本成美（別府溝部学園短期大学）

日本語はオノマトペが多い言語と言われており、実際の会話の中でも多数のオノマトペを使用している。しかし、日本語母語話者が簡単だと思っているオノマトペも、学習者は知らないものが多い。本研究では日常場面に特化したオノマトペを選定し、その特徴を探ることを目的とする。語彙は3つの先行研究と1つの言語資料を基に100語選定した。そして、その特徴として1点目は、日常語彙はすべて擬態語としての機能を持っており、36%は擬態語を含んだ複数の用法を持っていることがわかった。2点目に、分類語彙表に基づき使用場面を確認すると、部門では抽象的関係が最も多く、その中の語彙としてはただ「多い」ことや「少ない」ことを表すだけでなく、どのように多いのかを表現できる語彙が複数あることがわかった。また、中項目では「心」に関するオノマトペが最も多かった。

C11(42).中日同形語「評判」に関する一考察 ―コロケーションを中心に―

劉新琳(湖南大学大学院生)

中国語と日本語は同じく漢字表記を使用することによって、両言語において同じ漢字が使われている中日同形語が生まれた。しかし、同形語であっても、中国語と日本語の間に意味や品詞のずれがあり、学習者は使用する際に誤用を起こすことがよくある。本稿は、中日同形語「評判」を取り上げて、それぞれのコロケーションについて検討した。その結果、中国語の“評判”は動詞と名詞の両方として使われているのに対して、日本語の「評判」は今主に名詞として使用されていることが分かった。また、両者を名詞として使う時に、コロケーションの相違に注意しなければならない。

C12(43).日本語教師養成研修に参加する研修生の動機調査

大日方春菜・松田涼子（国際交流基金マニラ日本文化センター）

本稿では、フィリピン公立中等教育機関で日本語を教える教師を育成する「日本語教師養成研修」の参加者に目を向け、研修への参加動機を調査分析した。第一次調査として、既に研修の全過程を修了している第5期生へのインタビューを行い、質問紙調査を作成し、二次調査として、2022年7月から開始された第6期研修生49名に対して質問紙調査を実施した。分析の結果、研修への参加動機は研修生の所在地域や学校で教えている主担当科目によって傾向の違いが見られることが分かった。

C13(44).「名古屋人」を題材にして意見を書く ―読解及び対話から多角的視点を獲得し、批判的思考を育成する試み―

萩原幸司（名城大学）

本発表では、交換留学生を対象とした日本語の授業での発表者の実践を報告する。彼等は名古屋及びそこに

生きる人人の実態に強い関心を示していた。発表者はそれに応え、授業で名古屋の人人についてのエッセイを読解させた上で、留学生達自身が「名古屋人」達と話し、題材にしたエッセイで述べられていた事象の真偽を確かめるように促した。更に、「名古屋人」を彼等自身の地元の人人と比較させて意見文を書かせた。発表者は、彼等が異なる国や地域に関する情報を享受するのに留まらず、対話を通して多角的視点を獲得し、批判的思考を発展させるまでに至ることを意図したのである。

C14(45).日本語スピーチ大会指導における日本語母語話者教師の専門性への一考察 ―中国で指導を経験したある教師の語りの分析から―

末松大貴（名古屋大学大学院生）・細井駿吾（所属なし）・山田茜（東京外国語大学大学院生）

本研究は、中国における日本語スピーチコンテストに焦点を当て、実際に指導を経験した3名の日本語教師が、「スピーチ大会指導における日本語教師の専門性」をどのように認識しているのかについて、相互インタビューを行った活動を対象とする。そして、そのなかの1名の教師に焦点を当て、質的なデータ分析方法であるSCATを用いて、「スピーチ大会指導における専門性」をどのように認識しているのかを、発表者と共同発表者で分析した。その結果、本研究では「教師としての反理想像」と「スピーチの練習内外での学習者の言動」という2つの要素が、「スピーチ大会指導における日本語教師の専門性」の認識に影響を与えることが示唆された。

●ラウンドD 14:25-15:25（発表件数14件）

D01(46).AR技術を利用した日本語会話活動 ―台湾人学習者を対象に―

鈴木美穂（中台科技大学）

本研究ではAR技術を取り入れた日本語会話活動を設計した。本研究の目的は、AR技術を使った会話活動において、どのような学習効果が期待できるか、また、学生の学習意欲に変化があらわれるかを探ることである。会話の様子を撮影した後、学生にインタビュー調査を行なった。結果、高い動機づけが生まれ、学生に自律的な学習を促すことがわかった。また、疑似的に日本語を話す環境を作り出すことで、学生は会話のスタイルや接客における礼儀正しさを意識するようになった。

D02(47).学部留学生のための専門連語の役割 ―経済の専門連語を例に―

小宮千鶴子（早稲田大学）

大学学部留学生は、学部入学前か入学後の早い時期までに高校卒業程度の専門語とその専門連語を習得することが望ましい。本発表では、中学高校教科書から選定された「留学生のための経済の専門連語」を資料として、専門連語には次の二つの役割、すなわち、①専門語の有意義な用法、②専門概念の学習項目、があることを明らかにした。さらに、②の場合は、専門語の学習語彙の分類基準や専門連語の表現学習の資料になることを指摘した。

D05(50).中国の大学における日本語教育の変化とその対応 ―大学入試で日本語を選択する受験生を対象として―

王凌志（広州工商学院学部生）

近年、中国における大学入試の外国科目で、日本語を選択する学生が急速している。この現象に基づき、大学日本語専攻を選ぶ日本語受験生が非日本語受験生より多いことをもたらしめている。学生の日本語レベルが一致していないため、教師は学習進度を集計しにくい。また、日本語の授業では日本語受験生が初級日本語を軽視する現象と、非日本語受験生は、クラスの日本語受験生の割合が大きくなるため、学習のストレスを受ける現象を生じた。本研究は、上記の現象を分析し、クラス分け教学計画が実行可能かどうか、及びどのように

教科を配置するかを探求し、日本語の教学改革のために提案と構想を提供する。

D06(51).AI チャット bot サービス「エアフレンド」を活用した授業実践 ―台湾の大学における初級日本語会話授業から―

潘寧（台湾大同大学）

本研究は、AI チャット bot サービス「エアフレンド」を台湾の大学における初級日本語会話クラスに導入した授業実践について検討したものである。こうしたサービスは、時間や空間の制限なく、利用可能であることから、今後さらなる活用が期待される。筆者は実際の対人コミュニケーションのためのスキファオールディングとして、「エアフレンド」を日本語の練習手段とする授業を考案した。授業後のフィードバックからは、AI との会話と生身の人間との会話の間には、ストラテジーと配慮表現に違いがみられることへの学習者の気づきが確認できた。

D07(52).より深い討議・学びを目指した「ケースメソッド」の授業設計 ―討議前の準備に注目して―

アドゥアヨム・アヘゴ希佳子（宝塚大学）・鈴木綾乃（横浜市立大学）

本研究では、ケース教材をもとに、参加者が討議するケースメソッド授業において、より深い討議・学びのための授業設計・準備の在り方を考察するため、授業計画書を分析した。その結果、1）教育目的を熟考することにより、授業の仮の到達地点を設定し、討議の方向性を定める、2）「討議を通して考え、自分のものとして獲得してほしいこと」を練り、討議を深めるための重要な論点を明確化する、3）設問を設定し、その論点について繰り返し考えるよう導く、4）発問を準備し、設問を別の角度から考えさせる、という4点が重要であると指摘された。より深い討議・学びのためには、教育目的達成を目指した緻密な授業設計が必要となる。

D08(53).Tencent スプレッドシートを活用したピア・レスポンスの実践

夏逸慧（広州工商学院）

中国では、Tencent スプレッドシートは複数ユーザが同じファイルに同時に閲覧したり、共同編集したりすることができるので、外国語教育に活かされている。そのため、本研究では中国の大学における「日本語基礎作文 II」授業を対象とし、Tencent スプレッドシートをピア・レスポンス活動に用いた事例について報告し、その教育的効果について明らかにすることを目的とする。その結果、スプレッドシートは自発的な協同学習の環境を構築するだけでなく、作文に関連する内容の自動的な記録・共有・参照できる機能はピア・レスポンス活動で生じる作業負担を軽減することができることを明らかにした。

D09(54).「生活者としての外国人」の漢字字体習得に向けた K コードの活用

高橋志野（愛媛大学）・向井留実子（愛媛大学）・中村かおり（拓殖大学）・伊藤江美（拓殖大学）

本研究では、Taha(2020)が開発した「漢字字体学習法」である K コードが、学習時間の確保が難しい「生活者としての外国人」にとっても有効かどうか調査した。日本語学習最初期の非漢字圏配偶者 2 名に試験的な指導を行ったところ、①指導者の観察と被験者のコメントでは、両名に字体を識別する力が身につき、書字に抵抗感がなくなったなどが確認でき、②日本人 38 名による指導前後の字形評価では、指導後のほうが高く評価されていたという結果が得られ、K コードの有効性が示唆された。

D10(55).上級日本語学習者を対象とした対話型短歌鑑賞授業の試み

八木真生・伊達宏子（東京外国語大学）

筆者らは上級日本語クラスにおいて、想像力やコミュニケーション能力を高め、学び合いの意義を実感する機会を提供することを目的に、短歌を個人で自由に鑑賞し、その解釈を交換し合う対話型鑑賞の活動を行った。

また、専門家による解説文をどう捉え、受け止めるかも考えてもらうため、解説文付き鑑賞活動も同時に実施した。本稿では、実践内容を報告し、学習者による短歌の解釈・気づきの記述を分析し、活動の意義と課題を示した。分析の結果、学習者らは、いずれの活動にも大きな意義を感じていたことが明らかになった。一方で、言語的に正確ではない解釈、根拠不明の解釈も見られたため、今後の課題としてそれらへの対応策を示した。

D11(56).日本人学生と留学生のためのオンラインにほんごワークショップの実践報告 ―日本人学生の振り返りに着目して―

久保田育美（明石工業高等専門学校）

筆者は、勤務校における留学生の多様化を背景に、日本人学生が留学生と日本語を通してコミュニケーションを図ること目的としたオンラインにほんごワークショップを実施した。参加者同士の協同作業を取り入れた活動を4回にわたり実施し、各回の終了後に日本人学生に振り返りアンケートへの回答を求め、振り返りの内容を日本語使用および協同学習の観点から分析した。その結果、参加した日本人学生が、留学生に対して使う日本語に工夫が必要だという気づき、相手文化への関心の高まり、そして、グループ作業、相手、自分に対して「嬉しい」「面白い」「尊敬する」等のポジティブな感情を得たことがわかった。

D12(57).日本史教科書における語彙の比較 ―日本語学習支援を必要とする高校生への支援を考える―

斎藤里美（東京外国語大学）

現在日本語指導が必要な高校生が増えている。その多くの生徒が日本語が不十分なまま、様々な教科の学習をしなければならない。本稿では日本史の教科書を例として2社の教科書の語彙を比較した。頻出語のうち約60%は一致が見られた。しかし、その多くは専門的な語で日本語教育だけでは学べない。学校教育に合う日本語教育には他教科との連携をより進める必要がある。

D13(58).教育用 SNS「Flip」を活用したディスカッション活動の実践報告 ―対面授業における会話活動の安全性を意識して―

佐藤蘭礼（東京国際大学）・武田雅史（所属なし）

コロナ禍における対面授業では、学習者間の距離を確保することで、安全に会話活動を行うことが課題となっている。本稿では中級科目で行ったICTを用いた動画のやりとりによるディスカッション活動を報告する。教育用動画 SNS である Flip で意見を録画し、それに対する意見を動画で返信する活動を対面及び授業外で行った。授業外では言うまでもなく、対面授業でも学習者間の距離を確保したやりとりが可能となった。また、副次的であり教員の印象論ではあるが、授業外での課題提出による時間的猶予が思慮深い意見の提示につながったことが窺える。今後の課題は学習者へのアンケートなどを行い、一教授法としての成果を検討することである。

D14(59).留学生と日本人学生のキャリア形成支援のための教材設計 ―タスクとプロジェクトに焦点を当てて―

中井陽子（東京外国語大学）・菅長理恵（東京外国語大学）・伊集院郁子（東京外国語大学）・渋谷博子（クリエイティブ日本語学校）

日本語学習者及び日本人学生を対象としたキャリア形成支援のための教材設計について報告する。本教材は、元留学生の体験談をまとめた読み物教材および体験談からの学びを発展させるためのタスクとプロジェクトから成り、課題発見・解決能力や人間関係構築力を養うことを目的としている。グローバル社会での身の処し方についての議論や体験を通し、様々な場面で臨機応変に対応するための知識やスキル、思考力を高めることを目指してタスクとプロジェクトを設計した。テーマとして、異文化間コミュニケーション、キャリアブ

ラン作成、自己PRなどを取り上げている。

D15(60).ミャンマーの国定物理教科書の分析 ―熱力学分野の日本の検定教科書との比較―

田辺直行（湘南鎌倉医療大学）・喜古正士（早稲田大学）

ミャンマーの国定高校物理教科書と日本の教科書の熱および熱力学の分野を比較した。その結果、日本の教科書に対するミャンマーの教科書の内容充足率は、式・図・表で11%、項目で12%であり、ミャンマーの教科書には、気体のエネルギーと状態変化の関係が全く含まれていないことがわかった。一方、ミャンマーの教科書には、熱の伝導、対流、輻射、固体の面積膨張、体積膨張など、日本の教科書には記載のない、技術者が製品を作る上で重要な内容が載っていることが分かった。これらの違いを知っておくことは、ミャンマーの留学生に熱および熱力学分野の物理を教える上で必要不可欠であろう。

D16(61).理工系専門教員は留学生の日本語能力をどのようにとらえているか ―アンケート結果から―

長谷川由香（法政大学）

理工系専門分野の教員を対象にアンケート調査を行い、研究室および担当授業における学部留学生と大学院生の日本語使用状況および運用能力に対してどのように認識しているのか、さらに指導が必要とされる技能について探った。その結果、教員は留学生の作文能力について最も能力不足を感じており、理工系専門用語の運用能力不足や、母語との語彙の違いによる混乱が指摘された。次いで会話能力、特に質疑応答の指導の必要性が指摘された。さらにアンケートで取りあげた日本語運用能力は留学生に限らず、日本人学生にも共通の問題点であることが示唆された。

【会費納入のお願い】

JLEMでは4月から翌年3月までを会計年度としております。2022年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。郵便局に口座をお持ちであれば、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点は、jlem-ml#jlem-sg.org(＃は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店(ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会